

中央アジア神話と日本神話

マイケル・ヴィツェル Michael Witzel

ハーバード大学 Harvard University

翻訳：松村一男（和光大学）

序

過去 100 年以上にわたって、幾多の日本神話の比較研究が行なわれてきた。たとえば松本信広は東南アジア神話との比較を、そして大林太良は広く世界規模の比較を行なった。また吉田敦彦氏は、『古事記』、『日本書紀』と北イラン（スキタイ）神話、ギリシア神話、そしてその他の西インド・ヨーロッパ語族神話との比較を長年にわたって行い、多くの成果をあげてきている。

実際、想定される日本神話の縄文的基盤を別にすると一考古学出土品の解釈はつねに困難をとまなう。ネリー・ナウマンの縄文の土偶や文様の研究を参照されたい一、アジア大陸から言語、文化、そして神話について大きな伝播の波があったことは明らかである。ここでは日本神話を内陸アジアの広大な地域の彼方の＜外部から＞眺めてみたい。そうすることで、一般的な比較と歴史的な比較の両方を行ないたい。つまり、新しい＜歴史的比較神話学＞の手法によって、連続する時代層を再建したいのである。

そのために必要となるのは、基礎となる多くの古代神話の資料群である。中国の場合、紀元前後からの多くの作者（しばしば神話に敵対的）の断片的な記述をつなぎ合わせて神話を再構成しなければならないが、日本には幸いにも古い神話資料が残されている。記紀（『古事記』と『日本書紀』、712/720 年）資料は、内容的にはこの文字化の段階を数世紀遡るものである。加えて、近い関係にある満州の高句麗の神話（前千年紀の後期および後千年紀の初期）も利用できる。ただし両方の人々の共通の祖先を年代的・地理的に特定することは難しい。中央アジアの西端での比較の対象はインド・イラン語派で、ここでの資料は古代イラン（『アヴェスタ』）とヴェーダ期インド（『リグ・ヴェーダ』他）のものである。

吉田敦彦氏は北イラン（スキタイ）神話との比較を行なったが、私は対象をさらに拡大して、紀元前 2000 年頃のインド・イラン語派におけるその祖先に当たる神話や、その元の神話の後代の形である古代イランやヴェーダ期インドの神話との比較も行な

いたい。先述のように、北インド語（ヴェーダ期サンスクリット）とイラン諸語、そして北インドとイランの儀礼や神話は、インド・イラン語派という共通の源泉を有する。彼らはそれぞれがイランと北インドに移動する以前は、中央アジア西部のステップベルトに住んでいたに違いない。

中央アジアの草原ベルトは、紀元前 4000 年頃の中央アジア西部における馬の家畜化以降、迅速な移動が可能な「ハイウェイ」となり、東端の満州の高句麗人—大陸における日本人の親戚—から西端のルーマニアまでがつながるようになった。満州から北イラン人（サカ族）の居住域東端である新疆（大モンゴリア）までの間の地域は、歴史の初期および先史時代にはトルコ系言語を話す人々が住んでいた。しかしさらに古い時代（紀元前 2000 年頃）には、中央アジアステップベルトのインド・イラン語派は、新疆から朝鮮半島北端までの東方の隣人たちと直接的、間接的に交流を行っていたのである。

残念なことに、新疆西部（インド・ヨーロッパ語族系のトカラ人とサカ族）とヤポニック語（後述）を話す高句麗人の地である満州との間にある「ギャップ」は簡単には埋めることが出来ないものだ。大モンゴリア地域の古代のテキストは残っていない。最も古いのは、後 700 年頃にトルコ語で書かれたオロホン碑文であり、その次に来るのは後 1240 年の『モンゴル秘史』である。古代トルコと（前）モンゴルの人々の神話として再建できるものの細部についてはここでは論じないが、その一部にはインド・ヨーロッパ神話や日本神話との緊密な関係を窺わせるものがある。たとえば、天（父）の崇拜、大地母、男の火神、天からの支配者の降臨、北方（シベリア）型のシャーマニズム、階層社会、馬の供犠（アルタイ語族においては 19 世紀後半まで存続！）などである。

なお、初期のトルコ系民族と他の「西夷」については、中国では商（殷）以来の歴史文書記録がある。『竹書紀年』には狄についての半歴史的記述があり、前 12 世紀には狄に対する遠征が行なわれ、「12 人の狄の王」が捕らえられたという記述が見られる。

他の中央アジア東部の諸民族としては、鬼方^{きほう}や異なる狄^{てき}のグループ（白狄、赤狄、長狄（^{きょう}長狄））、羌^{きやう}（すでに『詩経』に見られる）、貊^{しりよ}虜（青海湖地域に住む）、胡（西の異邦人一般を指す）などが挙げられている。現在の陝西省^{こうせい}、甘肅省^{かんそう}、寧夏回族自治区^{ねいか}に相当する地域で最も有力だったのは、戎^{じゅう}、允戎^{いんじゅう}、姜戎^{きやうじゅう}（羌と同一か?）、犬戎などである。獫狁^{けんいん}〔=匈奴〕は前 770 年には周の首都を陥れている。北イランのサカ族（賽）はこの少しの後（前 7 世紀末）に新疆・カザフの境界であるイリ川とチュウ

川の谷部に姿を現わす。この後には月氏、烏孫、そしてさらに後には匈奴が登場してくる。

したがってここでは紀元前 2000 年頃の古代インド・イラン神話に集中することにした。つまり、何百頁にもおよぶ原語の宗教テキストに記された古代イラン（『アヴェスタ』紀元前 1000 年以降）とインド（ヴェーダ、紀元前 1000 年以降）の良質かつ広範囲の資料を手がかりとして言語、人々、文化についての再建像を考察するのである。

すでに述べたように、インド・イラン人の原郷であるアジアのステップベルトは、朝鮮半島北部／満州からルーマニア／ハンガリーにわたる全域での素早い遊牧民の軍事的・文化的交流によって特徴づけられる。ユーラシア大陸西部および新疆のステップベルトでのインド・ヨーロッパ語を話すインド・イラン人と、モンゴリアおよび満州といったその東地域での隣人たち（狄、戎、羌）との間の交流は、紀元前最後の数世紀および紀元後最初の数世紀において彼らが高句麗人の祖先と近い関係にあった可能性を示唆するだろう。

満州の高句麗語は古代日本語と確実に言語的親戚関係をもつ唯一の言語である。大陸の高句麗人（王国は前 37 年から後 668 年）と弥生時代の日本列島の人々に共通の言語と文化の祖先（勿論、遺伝子レベルの問題ではない！）は、「ヤポニック」として再建される。高句麗人については 1910 年以来注目されてきた中国の資料があり、インディアナ大学で中央アジア研究を行なっているクリストファー・ベックウィズ

(Christopher Beckwith) によって検討されている (*Koguryo*, Brill, 2007, 2nd edition)。高句麗人の言語は古代日本語に近い（たとえば数詞の 3, 5, 7 (nanum)、属格の -n- など)。高句麗神話もたとえば「初代」王の起源に関する神話のように一部は知られている。これには興味深い対応例が日本、インド、中国、そしてその他地域にもある。この点は以下でまた触れる。

初期弥生文化は紀元前 1000 年頃まで遡ることが明らかになってきた。その点を考えるなら、中央アジア東部のイラン人（サカ族）と満州、日本、沖縄の人々の祖先になるヤポニック語の話し手との交流の可能性は否定できなくなる。重要な神話のいくつかについてはすでに考察を述べたことがある（たとえば太陽消失の神話、Witzel 2005 参照 [この論文については末尾の訳者付言を見られたい]）。しかしながら以下に見るように、こうした繋がりには前 1000 年頃（周代の狄の例）より遙かに古い時期、すなわち前 2000 年頃のインド・イランの人々、言語、神話にまで遡るに違いない。私は前 2000 年から前 1000 年にかけての大モンゴリアの「空白」地帯を經由しての「ステップ神話

群」のリンクを想定するのである。

この点に関連して、北インドと日本が「ギャップ」を埋めるための、中心部から離れた「避難」地域として機能した可能性を考えておかねばならない。日本は海を隔てており、北インドはヒンドークシュとヒマラヤの大山脈の彼方である。これに対して、カザフスタン、ウズベキスタン、キルギスタン、トルクメニスタン、タジキスタンといった中央アジア西部と大モンゴリアが含まれるステップベルトの中央部では、状況の変化はより早かった。その理由は絶え間ない部族や人々の移動と再編成である。このために、イラン系、フン系、トルコ系、モンゴル系の人々の神話は、ヴェーダ期インド神話とも日本神話ともあまり似ておらず、しかし、ヴェーダ期インド神話と日本神話の間には多くの類似が見られるのである。言語学、人類学、生物学、遺伝子学、手稿の系統などの分野でも知られていることだが、古形は周辺部においてよりよく保存されるのである。

インド・イラン神話と日本神話の一致はときに鮮明で広範囲だが、ときには不鮮明で局所的である。しかしいずれにせよ、無視するにはあまりに数多い。例として次のようなものがある。

- ・ 創世神話
- ・ 神々の最初の世代
- ・ 多くの孤立した細部<特異事象> (デュメジル)
- ・ 神武／プルーラヴァスあるいはヴィデーガ・マータヴァ／オッカーカなどの建国者についての細部

これから述べる日本神話と古代インド（ヴェーダ）神話、古代イラン神話との多くの類似や一致はこの視点から考察される。インド・イラン時代の資料としてはヴェーダ期インドが主になるが、その理由は古代イラン（アヴェスタ）宗教・神話の資料が200頁ほどしかないのに対して、ヴェーダは遙かに豊富だからである。最古期の『リグ・ヴェーダ』だけでもアルファベットテキストで800頁分（1.4MB）あるのだ。

しかし古代インドは日本神話との比較資料としてはあまり活用されてこなかった。一つの理由は古いテキストの多くが翻訳されてこなかったこと（いまだテキストとして活字化されていないものもある）だが、もう一つは、仏教の日本への伝播（後1000年紀半ば）以前の時期における遠方のインドと日本とのつながりを想定してこなかったためであろう。

以下では、ヴェーダ期インドと古代日本の神話で極めて類似する例をいくつか紹介

する。また必要に応じてイランとインド・ヨーロッパの例も取り上げる。しかしここでは個別神話の世界規模の比較をするつもりはない。そうした比較としては大林太良の業績が名高い。しかし今回はより限定的でありたい。ただし、日本・インド・イラン（あるいは日本・ヴェーダ）共通神話の仮説の妥当性を検証するため、そしてまた、それらの神話群がより古いインド・ヨーロッパ、ユーラシア、そしてさらにはパン・ガイア期にまで遡りうるものかを検証するために、個別神話モチーフの世界規模比較を今後行なうことが必要になるとは考えている。それを行なえば、ヴェーダ・記紀神話の結びつきが、インド・ヨーロッパ神話やユーラシア神話間での結びつきよりもはるかに強いものであることが明らかとなるだろう。その一部は、今回の発表でも感じてもらえると思う。

ヴェーダ神話、日本神話、イラン／インド・ヨーロッパ神話の対応

1. 最初の神々

日本神話の最初の神々は不鮮明である。インド・ヨーロッパ神話には原人（ヴェーダのプルシャ、ゲルマンのユミル。なお、中国の盤古も参照）がいるが、日本神話にはいない。その代わりに、最初の五代の神々（別天つ神）やカムロキ、カムロミなどの曖昧な存在がいる。

2. 原初の牡牛

『リグ・ヴェーダ』(3.38)にもイランの『アヴェスタ』にも原初牡牛が見られるが、日本にはない。しかし以下の議論で重要となるので、推定される再建形を記しておく。

原初、二人の男と一頭の牡牛がいた。彼らはマヌとイエモスという双子であった。マヌは最初の神官で、イエモスは最初の王だった。マヌはイエモスを犠牲として、体を解体し、それぞれの部分から世界を創造した。ついでマヌは牡牛を犠牲とし、解体して、それぞれの部分から食用となる植物と家畜を創造した。最初の死者となったイエモスは死者の王となり、彼に続く者たちのための王国を開いた。

この要素の日本神話との関係は不確実である。また、京都の北野天満宮に見られるスサノヲと牡牛のつながりが関係するのも不確実である。

3. 天父地母

イザナギとイザナミはそうは呼ばれていないが明らかに天父地母であり、インド・ヨーロッパおよびトルコ系、モンゴル系神話に対応例をもつ。彼らの子どもは、ギリシアのティタン族／オリュンポス族、インド・イランのアスラ／デーヴァ、日本の天つ神／国つ神のように最初の神々である。これらのグループは対立するが協調もする（日本神話の場合については千家和比古氏の論考を参照されたい）。

注目したいのはイザナギとイザナミの近親相姦である。これはインド・イランの*ヤマと妹の*ヤミーの場合と極めて似ている。もちろん、原初の近親相姦の神話は他にもたくさんあるし、旧約聖書のアダムとイヴ、ポリネシアのランギとパパのように多くの文化で知られている。それは（日本神話の別天つ神や神世七代は別だが）、大抵は性的交わりによって子孫を生む最初の神々が必要だからである。

しかしここで重要なのは、インセストの〈出発点〉と〈結果〉である。最初にイザナミは話しかけたため形の定まらない不完全なヒルコが生まれ、モーセのように水に流される。ヴェーダではヤミーがヤマ（ヤマは「双子」を意味する）にセックスを迫るが、ヤマは拒絶する。その代わりに双子ではないマヌが相手となり、最初の人間が生まれる。イランではインセストは否定されていなかった（『アヴェスタ』テキストではむしろ推奨されている）。もう一つのヴェーダ神話では原初女神アディティの生んだ子は丸い形の不完全な存在とされ、その点も日本神話と似ている。

4. 神々の二項対立

インド・イラン神話において、捨てられて太陽神となる胎児と強い関連があるのが、その兄弟たちの神群アスラ／アフラである（原初母神アディティから生まれたのでアーディティア神群とも呼ばれる）。彼らはもう一つの神群のデーヴァと対立する。両者の関係は日本神話の天つ神／国つ神の場合と似ている。

インドのアディティ（「束縛しない者」）に相当するのがイランのアナーヒター（「束縛されない者」）である。

前 2000 年頃にユーラシアステップ北部でインド・イラン共通語の話し手が考えていた*アスラ／*デーヴァの対比はその後各地に広がり、南では初期ヴェーダとイラン諸部族に残ることになった。また東のモンゴリアと満州にも広がり、日本で天つ神／国つ神となったのだろう。

千家和比古氏の論考が指摘するように、出雲／大和の関係には従来指摘されている

ような政治的な側面ばかりでなく構造的な側面がある。古代ユーラシアの神話には、アイスランドからシベリア（ケット人）まで、そしてインド・イラン語派まで神々を二つの半族に区分する体系が広く認められ、日本の天つ神と国つ神の区分もこれに属するものだろう。この問題については、汎アジア的な比較研究を推進することも可能であろう。

5. 火神の名前

次にヴェーダ期インドと日本の火の神の比較をしたい。どちらでも女神の体内で成長する。日本ではイザナギからカグツチ（別名ホムスビ）が生まれる。インドでは火（アグニ）の別名の一つであるマータリシュヴァンがいる。この神は天上の神々のもとから古代の詩人ブリグに火をもたらしたとされている。

ホムスビとは「火の増殖」（イザナミの体内で）を意味し、マータリシュヴァンは「母の体内で成長」を意味する。火の神がこうした名前と呼ばれる必然性はない。多くの神が母神の胎内から生まれるし（体の他の部分からもあるが）、イザナミとインドの場合（アディティ、マナーヴィ）もそうである。

私はこの一致をデュメジルが＜特異事象＞（bizarrierie）と呼んだものの一例と見なしたい。日本語とインド・イラン語は系統的に無関係だが、言語を超えた一致が認められるのだ。こうしたことは太陽が隠れた洞窟を開く神の名前—タジカラヲとインドラ（トゥヴィバーフ）—の場合にも見られる（以下参照）。

イザナミはカグツチを生んだ際の火傷が原因で死んでしまう。これに怒ったイザナギがカグツチを切り殺す。この神話についてはオランダのヴィム・ファン・ビンズゲルゲン教授が世界規模の視点での比較研究を発表することになっている〔この論文については訳者付言を見られたい〕。インド・イラン神話にはこの部分は見当たらない。ただ火の神アグニについてはその三重の誕生と死についての神話が残っている。もっともそれは、ヴェーダでよく見られる祭火儀礼についての思弁に影響されている（アグニは神々のもとを逃げ去るが、発見されて連れ戻される。最後に彼は儀礼の火となることに同意する）〔辻直四郎『古代インドの説話』春秋社、174参照〕。

6. オルフェウス型神話

カグツチを生んで亡くなったイザナミは黄泉国に行く。悲しみにくれるイザナギもその後を追う。悲しむ夫が冥府を訪れる神話ではオルフェウスとエウリュディケーの

ものがよく知られているが、このタイプの神話はユーラシアの内部（たとえばメソポタミアの『ギルガメシュ叙事詩』）はもちろん、外部でも、そして複雑な構成の一部として（たとえば北米先住民チェロキー族）知られている。インドの叙事詩（『マハーバーラタ』）では男女が逆転していて、悲しむ妻のサーヴィトリーが夫サティヤヴァントを追ってヤマの国に赴き、夫を連れ戻す。チェロキー族神話では七人の賢人が太陽の「死んだ」娘を赤い鳥として連れ戻す。そして彼女は再び輝きだす。このタイプの神話は日本とインド・イランに限定されず、地理的にはるかに大きな広がりを示している。

7. 太陽神の誕生とその性格

ギリシア神話ではアテナはゼウスの額から、ディオニュソスはゼウスの太ももから生まれている。だからアマテラスがイザナギの左目（多数派の伝承形）から、スサノヲが右目から生まれたというのもそれほど珍しい形ではない。インドラは母のわき腹から帝王切開で生まれている。彼は兄弟のマールターンダ・ヴィヴァスヴァントとともに生まれるとすぐに捨てられたが、インドラは並外れた力を有し、すぐ立ち上がったという。これに対してマールターンダは神々によって蘇生されねばならなかった。なお、インドラの誕生の様子は、釈迦が母のわき腹から生まれ、誕生後すぐに立ち上がったという伝承と同じである。

太陽女神としてのアマテラスの性格を対応するインドの曙女神であるウシャスの性格と比較することはあまり有効ではない。ウシャスは好色で崇拜者である詩人に対して「誘惑的」で、乳房を露出する（動物行動学では宥める際のサインの一つとされている）。これに対してアマテラスは大和朝廷の皇祖神であるためか極めて「道徳的」とされ、兄弟であるスサノヲとの間に子どもを儲ける場面でも具体的なインセストの描写は避けられ、相互の持ち物を噛んで吐き出すという「間接的」な手続きを採っている。

8. トリックスター神の乱暴

スサノヲとインドラのトリックスター的行為も比較すべき問題である。スサノヲとインドラはともに兄弟の「代役」といえる。同じようにマヌはヤマの代役である。スサノヲ、インドラ、ヤマはさまざまな乱暴を行なう。スサノヲは元来、海洋神であった。ところが日本神話では兄弟の月神（月読神）がすぐに姿を消してしまうので、代

役を務めるのである（初期ヴェーダ神話でも月は無視されている）。スサノヲとアマテラスは非・性的なやり方で八人の子を儲ける。これに対し、インドラの子孫は知られていない。そしてヴィヴァスヴァントは双子ヤマ／ヤミーとその兄弟マヌの父親である。

スサノヲとインドラはともに神々の社会の規範を破って、女性を追いかけ（聖なる織女、女神、人間の女性）、そのために変身し（インドラ、ゼウス）、神聖な誓いに背き（スサノヲ、インドラ）、殺人をし（インドラの従兄弟ヴィシュヴァルーパー殺し）、聖なる動物を殺し（スサノヲの太陽の馬殺し、インドラの馬（の首））、そして不快で下品な行為（スサノヲ）や暴飲暴食（インドラ）を行なう。さらにヴェーダとアヴェスタには次の世代の神であるヤマについても悪行の記述がある。ヴェーダのヤマの場合には具体性を欠くが、イランのイマについては明確である。ヤマもイマも死なねばならない。ヤマは冥府の王となる。イマは兄弟のスピティイウラによって鋸で切断されて死ぬ。

9. 原初神群の八人の子供たち

次に原初カップルのイザナミ／イザナギとディアウス／プリティヴィーの子どもの世代に移ろう。インドの場合、これはすなわちアディティの子どもということである。アディティの系譜はよく分かっていない。ただ「束縛しない者」（アヴェスタのアーナーヒターのように）というだけで、一世代後に位置づけられるかも知れない。

日本とヴェーダの親神からは八人の子どもが生まれる。ヴェーダの方は四組の双子である（ミトラとヴァルナ、アリヤマンとバガ、ダクシャとアンシャ、マールターンダ・ヴィヴァスヴァントとインドラ）。それぞれの双子は、アディティが祖先神のために準備された米の料理を食べた結果として妊娠し、生まれてくる。よくあるように食事はここでも明らかにセックスと同一視されている。インドでは（今でもそうだが）夫より先に妻が食事をすることは禁じられている。そこで彼女が四度目に料理を準備し、しかしそれを「先に」食べてしまったとき、彼女は非常に力強い双子を妊娠し、彼らはすでに胎内にいるときに話しはじめている。年上の兄弟たちはこのような優れた双子を恐れ、彼らを捨てさせた。しかしインドラは非常に力強く、一人で立ち上がり歩きだした。他方、マールターンダ・ヴィヴァスヴァントは「死んだ卵」のように形がなかった。彼は（丸い）太陽の神となった。彼はまた、最初の人間であるマヌ（ヴァイヴァスヴァタ）と最初の死者一といっても依然として神だが一であるヤマ・ヴァ

イヴァスヴァタ（とその姉妹のヤミー）の父親である。

不自然で非・性的な食事によって妊娠した八人の神々は日本のアマテラスとスサノヲの子どもに対応する。これを偶然と考えるのは難しい。原初の神々が子どもを生むが、それは「食事」という珍しいやり方によってであり、しかもそれは「八人」である。八は日本では聖数だがインド・イランではそうではない。〈特異事象〉なのはインド・イランの側である。この数は中央アジアの聖数観念の残存かも知れない。

「不自然」な出産は次のマヌの子どもの世代でも繰り返されている。マヌは最初の人間だし、ヤミーはヴェーダのインセスト禁止に抵触するので相手とはできない。そこでマヌは妻を「創造」しなければならない。彼はギー（バター脂肪）から女性を作り出す。マヌの十人の息子の中にはプルーラヴァスがいる。

10. 太陽の解放

インドではヴァラ、日本では岩戸と呼ばれる洞窟から太陽光が解放されるという重要な共通の神話がある。どちらの場合も、さまざまな神々と祭司の協力によって事態の解消が図られる。ヴェーダ（とイラン）ではインドラ・ヴリトラハン（イランではウルスラグナと呼ばれる）に率いられたデーヴァ神群と聖人アングラスによって、そして日本では原初の祭司の役目を果たすさまざまな天つ神と岩戸を実際に開くタジカラヲによってである。

インドラとタジカラヲがともに「腕が強い」という意味の名前であることは重要だ。これは、火の神がともに「母の内部で育つ者」という尊称を持つことと並んで驚くべきことである。その驚きは二つの言語が系統的に無関係だということとさらに強まる。ヴェーダ語では Tuvi-bāhu だし、日本語では Ta-jikara だ。マータリシュヴァンとホムスビの場合でもそうだが、ステップベルトの両端に同じ表現が残っているのだ。これは古式（アルカイズム）を示す〈特異事象〉であろう。この豪腕の神は、失われてしまった中央アジア東部の言語（先トルコ系か？）において同じ名前と呼ばれており、その名残りが高句麗、ついで弥生時代の人々に伝わったのではないだろうか。

太陽の解放の神話は日本とインドですべての段階に対応が認められる。いかに神々が洞窟に近づくか、いかに彼らが儀礼や祈祷やカーニヴァルの振る舞いによって「説得」を試みるか、そしていかにして英雄（インドラ、タジカラヲ）が扉を破壊して、太陽光を解放するか等々。

もちろん、以前指摘したように太陽の解放の神話はローマから北米、シベリアから

アッサムのナガ族やカーシ族のもとにまで多くの類例がある。しかし、ヴェーダ（インド・イラン）と日本のものが最も顕著な一致を示すのである。

1 1. 竜殺し

同じことは原初の竜（あるいは大蛇）を殺す神話にもあてはまる。ヴェーダのインドラは典型的な竜の殺し手である。ヴェーダでヴリトラハン、アヴェスタでウルスラグナというその尊称は、「抵抗の殺し手」（*vRtra-ghan）を意味した。インドラという名前の起源は明らかではないが、バスク地方からパキスタン北部のブルシャクシに広がるマクロ・コーカサス語族（phylum）に属する南中央アジア語か北コーカサス語に起源する可能性がある。

日本のスサノヲは八頭のヤマタノヲロチを退治し、クシイナダヒメと結婚するが、インドラは竜（または大蛇）のヴリトラ（「抵抗」の意）を殺す。ヴリトラは別名ヴィシュヴァルーパというが、「三つの頭を持つ竜」と呼ばれ、インドラの養父であった原初神の一人のトヴァシュトリの息子とされている。つまりインドラは自分の従兄弟を殺害するのである。

イラン（『アヴェスタ』）で竜を殺すのはスラエータオナあるいはクルサーSPAである。しかしインド・イラン神話には女性を解放し、彼女と結ばれるという要素が欠けている。ただし後代のイランのテキストにはこの要素が見られ、そこからアルメニア、コーカサス、そして中世後期のキリスト教世界（聖ゲオルギウスの竜退治）へと広がっていったらしい。女性の解放のモチーフは、ヴェーダにおいて失われたものかも知れない。

竜殺しの神話は世界各地にある。ギリシア神話のアポロンによるピュトン殺害は有名だ。メソポタミアでは創造神話『エヌマ・エリシュ』にマルドクによるティアマト殺害が述べられている。北米のナバホ族、中米のアステカ族、そしてポリネシアにおいても殺す相手は大きめのトカゲに変化しているが、このモチーフは認められる。

1 2. 原初の双子

原初の双子の運命に関しても日本とインドの神話は類似を示す。双子の神話としてはローマの建国者であるロムルスとレムス（*Yemos）が有名だ。インド・イラン神話のヤマ（北欧神話ならユミル）と同様に、レムスも殺害されている。

日本神話の双子は二例あり、ひとつはインド・ヨーロッパ神話に近く、もうひとつ

はあまり明確な類似を示さない。明確でない例はホデリとホヲリつまり海幸と山幸の神話である。この話では農業と漁業の対立が見られるが、その中で弟のホヲリは兄であるホデリの釣り針を失くして、海神の宮に行き取り戻してくる（竜の姿の姫との結婚もある）。復讐によって兄のホデリはほとんど殺されかけるが、最終的な殺人はない。ホヲリは初代天皇神武の父である。大和朝廷の創始者の兄弟殺しは一しばしばあることだが一別の世代に移項されているらしい。

より明確にインド・ヨーロッパ神話のパターンに合致しているのは、建国者神武の兄である五瀬の命の場合である。彼は約束の地である大和に入る前に殺されている（モーセがカナンの地に入る前に死ぬように）。

1 3. 最初の人間の支配者の神的起源

神武と五瀬の命の話とヴェーダの建国伝承と比較してみよう。太陽女神アマテラスから神武までは、アマテラス／オシホミミ／ニニギ／ホヲリ／神武の五世代である。インドの場合は断片的なイランよりもずっとよく知られており、アディティ／ヴィヴァスヴァント／マヌ（とヤマ、ヤミー）／プルーラヴァス／アーユの五世代とされる。誰を最初の王と見るかについては諸説があり、マヌとするもの、プルーラヴァスとするもの、アーユとするものがある。イランにおけるこれと対応する伝承では、アナヒーター／ヴィーヴァンフヤント／イマ（とマヌ）／ナバーナディシュタの四世代となり、五世代目は欠けている。

日本神話ではアマテラスの孫のニニギが地上世界を治めるのは、出雲系の神々が国譲りをした後である。つまり三代目から五代目であって、しかもその場所が大和や出雲でなく南九州の高千穂であることは興味深い。同様にインドでも太陽神から「三代目」以降が地上世界を治めている。アディティの息子ヴィヴァスヴァントはヤマ（冥府の王）と真の最初の人間の王マヌを子にもつ。マヌの長男ナーバーネーディシャは名前以外よく知られていない（イランのナバーナディシュタと対応する）。しかしもう一人の子プルーラヴァスは「王」と呼ばれ、アプサラス（ニンフ）のウルヴァシーと一時的に結婚する（が別れる）物語が有名である。これはホヲリが海神の娘で姿を変える能力をもつトヨタマと結婚する（が別れる）物語と類似している。

五代目のアーユは太陽種族の諸王の祖となった。これは日本の神武の場合と同じである。

14. 最初の支配者の降臨

神々の子孫である最初の支配者の地上への来訪の仕方でも二地域は似ている。日本ではアマテラスの「孫」のニニギが（石）船で九州の高千穂に降臨する。彼はホフリホフリの父で、建国者神武の祖父である。山に降り立つ点は朝鮮半島やアルタイ語族の神話と同じである。

インド神話で地上に降り立つのはアディティの「孫」で太陽神ヴィヴァスヴァントの子のマヌである。しかしこの話は洪水神話の枠組みで語られている。マヌは旧約聖書のノアのように船に乗って洪水を逃れ、ヒマラヤ山脈のナウバンドナ「船の拘束」という名前の高い山の頂に残される。日本でもインドでも船に乗って山にたどり着くという一致が見られるのは興味深い。

日本の場合、出発点は天上の天安川であり、地上の高千穂（東に向かう）に至る。そしてインドの場合、北の山（ヒマラヤ）からヴェーダ期インドにとって「聖地」の方向である南のクルクシェートラに向かう。プルーラヴァスの息子アーユはその蓮池で生まれている。クルクシェートラにはサラスヴァティーとドルシャドヴァーティーという二本の川が流れており、上流に向かう巡礼の一行は天に至る。これらの川は天上の天の川の支流なのである。

15. 二人の建国者：神武と Videgha/ Okkaka

太陽王朝の直接の子ではないが、ヴィデーガ・マータヴァと神武はともに「東」の世界の「初代」の王である。

神武は日向の高千穂から東の大和に向かう東征を行なう。興味深いことにインドの建国神話の主人公の一人であるヴィデーガ・マータヴァはインド北東部ビハール州の国ヴィデーハの初代の王とされるが、彼は文化の中心である西のクルクシェートラから野蛮な東の世界に進み、そこに建国したといわれている。これはブラーフマナの伝承だが、同じような話は仏典にも伝えられている。東のコーラサ国を作ったのは、オッカーカ（＝イクシュヴァーク）という王で、東に進んで建国したという。東の世界を文明化するという語りは歴史ではなく神話だが、二地域でよく似ている。神武もヴィデーカも「新しい領域」を占有して、王国を創始するのである。

16. 後継者たち

神武もマヌも長く繁栄した統治の時代を過ごし、老齢で亡くなっている。神武は大

和の南部、橿原に近い畝傍山に葬られたと伝えられる。後の垂仁天皇の時代になると、墳墓の周囲を埴輪で取り囲むようになったということだが、これはヘロドトスが伝えているスキタイで王墓の周囲に実際の間と馬を飾ったとする伝承と無関係とは思えない。

神武もマヌもその後の数代はあまり伝承のない諸王が続く。神武の場合、そうした王たちが八世代続き、九世代目に崇神天皇となる。興味深いことに彼は神武と同様に「初国知らしし」天皇と呼ばれ、明らかに歴史性のある人物である。同様にマヌの後継者たちは目立たない。そしてはっきりした世代は分からないが、パクリットがクル王朝の初代王として突然登場してくる。彼の治世は幸福で大麦と酒に事欠かなかったとされる。崇神と同様に彼も歴史的要素があり、北インドを支配したクル王朝の初代王とされている。

結論

結論として、古代日本神話とヴェーダ期インド（と古代イラン）神話との双方には一ダース以上の興味深い一致が存在することが明らかになった。そしてその大部分は紀元前 2000 年頃というインド・イラン語派共住期の中央アジアに遡ると思われる（洪水神話、隠された太陽、竜殺し、双子の誕生と出産といった幾つかのモチーフはさらに古いものである）。日本とインドはともに、中央アジアステップ連続の境界域のわずか外側に位置しており、ステップベルトの他の諸文化よりもこれらの神話をよりよく保存してきた。イラン人よりも、である（ただしその理由の一部は、より断片化していないテキスト群のおかげでもある）。

これらの一致は記紀神話が中央アジアと強い結びつきを持つことを示す。そしてこの問題はこれまで私が述べてきたような方向でさらに研究されねばならない（確かに、すでに日本の研究者たちによって行なわれているような、より広範なインド・ヨーロッパおよびユーラシアでの比較も行なわれねばならない。しかし、それに言及することは残念ながらここでは出来ない）。これ以外にも重要な神話モチーフはある。たとえば、オホゲツヒメなどの神々と食物の起源についての孤立した神話がある。この神話は農耕文化とともに生まれたもので、アジアの他の国々に対応例を有する。

最後にもう一度、デュメジルの〈特異事象〉の原理を有効に適用すべきという主張を繰り返しておきたい。孤立した要素は、大抵はすでに過去において失われてしまった古い要素である。今回の場合でいえば、紀元前 2000 年頃の中央アジアのものという

ことだ。この神話システムの込み入った細部は、本日述べたような方向に沿って再建できるし、これからも再建され続けねばならない。そしてそれは、アイスランドからハワイ、そして両アメリカ大陸まで至るユーラシアの他地域とローラシアとの〈歴史比較〉研究によってさらに推進されるものである。しかしもちろん、それは今回の発表の眼目ではない。

訳者付言：

この論文はハーバード大学サンスクリット語教授 (Wales Professor of Sanskrit) で比較神話学の分野においても、現在、最先端の理論を提示しているマイケル・ヴィツェル (Michael Witzel) 教授が、國學院大學で開催された第3回国際比較神話学会議 [2009年5月23日(土)]において発表された“Central Asia and Japanese Mythology”を日本の読者向けに翻訳したものである。発表原稿なので他の発表者の研究に言及している個所が複数あるが、読者が不自然に感じないように多少表現を変更してある。なお、オリジナルの英文原稿はかなり長大で、詳しい注や図表も付されているが、そのすべてを翻訳すると、専門家以外にはかえってこの論文の骨子が不明瞭になる恐れもあり、また逆に日本人にとっては自明な用語や概念についての説明もあったので、ヴィツェル氏の了解を得て、訳者が本文については適時選択をして訳文を作成してみた。したがってこれは忠実な翻訳でも全訳でもない。やや長めの要約とさせていただきたい (分量は本文の三分の二程度、注も含めれば半分程度)。さらに読者の理解を助けるために数箇所、〔 〕で補注を行なった。そうした不完全な形ではあるが、この原稿を是非とも邦訳したいと思ったのは、これがこれまでの日本神話研究にはないような大きなスケールでの比較研究であり、多くの方々にとって刺激になると感じたからである。ただ、非力な訳者のせいで思わぬ誤解や説明不足があるかも知れない。江湖の御教示を仰ぎたい。なお、以上のような経緯でなされた翻訳なので、訳文での問題の責任はすべて訳者にあることを明記しておく。

ヴィツェル氏のこれまでの日本神話の比較研究の代表的なものとしては、文中でも Witzel 2005 として言及されている”Vala and Iwato. The Myth of the Hidden Sun in India, Japan and Beyond”, *Electric Journal of Vedic Studies* 12. 1, 1-69 がある。その他の業績については、彼のホームページ

(<http://www.people.fas.harvard.edu/~witzel/mwpage.htm>) を見られたい。この発表の原文も Witzel 2005 もそのホームページで見ることができる。なお、彼が提唱している

壮大な「世界神話学」の理論は、オックスフォード大学出版から近刊予定の *The Origins of the World's Mythologies* でその全貌が明らかにされるはずである。

また文中で言及されているビンスベルゲン氏の発表原稿は極めて長大なものだが、原文は氏のホームページで読むことができる (“Izanami giving birth to Kagutsuchi/ Fire: Evidence for a widespread proto-historic cosmology revolving on an elemental transformative cycle, in Japan, Africa, throughout the Old World, and in the New World - as a step in the world-historic development of modes of thought” , 1-81. http://www.shikanda.net/topicalities/paper_Japan_final.pdf)。

(松村一男)